ラテンアメリカ・カリブ研究 第 8 号: 65–67 頁. ©2001

〔書評〕

CORAÇÕES SUJOS - A história da *Shindo Renmei.* (Fernando Morais, Companhia das Letras, 349 páginas, São Paulo, 2000)

田島久歳(Hisatoshi Tajima)
城西国際大学

Corações Sujos（『汚れた心』）は「臣道連盟」の活動についての歴史物語である。同書は 2000 年末にブラジルで発売されて以来、同国大都市の主な書店においてノンフィクション部門の売り上げ上位（4〜5 位）を 18 週間連続占めている (2001 年 4 月 25 日付 *VEJA* 誌による)。ブラジルにおける *Corações Sujos* の反響の大きさがうかがえる。

「臣道連盟」とは、第二次世界大戦前夜のブラジル・サンパウロ州で日系人の日本愛国主義的アソシエーションとして組織された秘密結社のことを指すが、正確な結成年は諸説あってはっきりしない。ただし、その前身は 1942 年に結成された「興道社」にあるとされる。「興道社」およびその後の「臣道連盟」は、異郷での日系人の精神的統一をはかり、日本精神の維持、何らかのかたちで日本の勝利に貢献することを模索するものであった。そのために、日系人が敵性産業に従事することを監視する役目も担っていた。

1945 年 8 月に日本が戦争に敗北した後、敗戦を信じないいわゆる「カチ組」となった「臣道連盟」員は、「汚れた心」の「マケ組」（認識派）を国賊として攻撃するようになった。「臣道連盟」は、1947 年の始めに活動を停止するまでブラジルの日系社会を震撼させた「特行隊（トッコウタイ）」テロ集団を擁する「危険な」団体へと変貌したのである。

Corações Sujos のストーリーの骨子は、サンパウロ州の日系人社会を舞台として展開した「カチ組」の「特行隊」による「マケ組」へのテロ活動を中心に据えられている。

ストーリーの中心は、「皇軍が戦争に負ける筈がない」と信じた「カチ組」が、アメリカを始めとする連合国（ブラジルを含む）のデマによって日本は敗戦したと信じる「マケ組」に対するテロ活動を行い、ブラジル日系社会を一時期分断させただけでなく、ホスト社会との数々の軋轢を産んでいったと位置づけているところにある。ストーリーは、また当時の国際社会や国際政治、およびその中でブラジル社会がおかれていた状況などに照らしながら進行する。

同書のあらましは、まず「7 人のサムライ」ならぬ「7 人のヒーロー」が、1942 年に日本の国旗を侮辱したとされるサンパウロの田舎町トウパン市の警察署長である曹長を殺害しようとするエピソードに始まる。この事件は、ブラジルの敵国民である日本人移民を含めた枢軸国民に対して数々の制約が課せられていたなか（集会の禁止、日本語教授の禁止、公の場で日本語使用の禁止、海岸から 100km 以遠への強制退去等）、日系人が集会を開き深夜まで騒いでいたとして、曹長がこれを解散させた上、集会の場に掲揚されていた日本の国旗で靴を拭いたことに端を発している。このはなしを聞きつけた 7 人の移住者（表紙の 7 人）が、国旗に対する屈辱をはらすため、曹長の殺害をはかったものである。いうまでもなく、素人集団による暗殺計画は見事に失敗した。

作者によると、上記に端的に現れているサムライ精神は日本人移住者の間に脈々と継承され、戦争が終わった後も、「カチ組」による「マケ組」に対する脅迫およびテロ攻撃が続いたという。標的となった「マケ組」の人々は、ブラジル社

Corações Sujos の表紙

会に比較的インテグレートされ、経済的な成功をおさめており、警察と協力しているのではないかと疑われていた。その攻撃は、適性産業論に基づき、戦時中・戦後をとおして日本の敵国を利するとされた活動（絹や胡椒の生産）を行う日本人移住者をも対象としていた。「カチ組」のテロ行為に関わった人々は少数派であるが、当時の日系社会に心情的には「カチ組」を支持する人は多かった。

ストーリーは 7 人の活動を追いながら展開するが、日系人がブラジル社会で「差別」されていると感じていた点についても触れている。例えば、当時のブラジル社会の「排日的」雰囲気を新聞の論調、オピニオン・リーダーの発言、また一般の人々の行動（サンパウロの二つの地方都市でおきた日系人無差別襲撃事件）などを巧みに紹介しながら明らかにしていく。同時にこうした動きとともに日系人社会の内部が揺れ動く有り様も上手に描いている。

さて、ブラジルで非合法的活動を行っていた「臣道連盟」関係者は当然のごとく当局の調査を受けるが、その過程で 31,380 人の日系人がブラジル警察による逮捕・取り調べを受けた。うち 381 人が起訴され、80 人が国外追放の刑に処せられた。もっとも、すぐ国外追放されたわけではなくアンシエッタ島の刑務所に投獄されていたのだが、1956 年にジュツセリーノ・クビチェック大統領によって恩赦が与えられ、自由になった。このことによって、日系社会の傷痕が癒され、日系社会とブラジル社会との間に生じていた亀裂が修復されたということを著者は示唆している。

最後に、2000 年 10 月時点では、7 人の「特行隊ヒーロー」のうち、3 人の生存者が確認されたことを明らかにしている。そのうちの一人はキンタナ市で自転車販売店を経営し、残りの二人はサンパウロ市で隠居生活を送っている。逮捕されずに「ロウニン」となって最後まで逃

亡を続けていたエイイチ・サカネは 1960 年代半ばごろにマサオ・コガと名乗り、写真機器の販売人になっていた、と結んでいる。

物語は、文章構造もやさしく、平易なポルトガル語で書かれており、読みやすい。

同書は次の点から高く評価できる。(1) 多くの裏づけ資料を駆使している（生存する関係者へのインタビュー調査、日系人資料館、およびブラジル側資料館の資料を使用）。(2) 同テーマについて、非日系人によるまとまった歴史物語としてポルトガル語で初めて書かれたものである。(3)「臣道連盟」関連事件について、当時のブラジル社会と国際・国内政治の中に位置づけている。(4)「マケ組」や「カチ組」のいずれにも組することなく、バランスのよい記述になっている。(5) 日系人についてだけでなく非日系ブラジル人についての評価や批判をさりげなく客観的に行っている。

著者は、一連のブラジル側からの見方として、(3) にみられるように時代精神に沿って解釈を試み、(5) にみられるように日系人がブラジル社会から差別されていた点を指摘している。さらに、日系人側においては、ブラジルはあくまでも一攫千金をめざして渡った国であることから、いずれ帰国するという意識があったとしている。つまり、日系人にとってブラジル社会への統合より蓄財して帰国することが至上命題であったが、それに追い打ちをかけるように「敵国日本」からの移民として差別を受ける環境のなかで、ますますブラジル社会への統合を図ろうとする意志をなくしていった。そうしたなか非日系ブラジル人と日系人の間の意志疎通がますます困難となり、日系人が一層帰国を切望するようになっていった、と示唆している。

この作品をとおして、次のことが確認できる。21 世紀初めの今日において、日系人社会、特にサンパウロの日系人がブラジル社会に統合されていること。それは作品の随所からうかがえるが、たとえば、モライスは日系人を japonês(es) japonesada と呼んでいる。これは北米における Japanese や Japs といった呼称とは異なり、バイアス、タブー、先入観、差別意識を排除したうえで単にブラジルの民族集団、例えば português、italiano、alemão といったものと同等な意味で使用している。さらに、ブラジル移住初期のころの日系人が、ちょぼ髭を生やす習慣から、非日系ブラジル人によって *bode*（山羊）と呼ばれていたとして、同用語を使用している。これは裏返して見れば、日系人社会がブラジル社会において一定の歴史を積み重ね、ネーション・ステート全体の一部を構成する存在として認められていることの現れだといえる。

モライスの作品は、日本側の研究書や資料を使用していないという欠点はあるものの、同書が非日系ブラジル人によってポルトガル語で、大手の出版社から発行されたことの意味は大きい。しかもこれまで公的な歴史において「人種デモクラシー」の社会とされてきたブラジルにおいて、実際にはこのイデオロギーがあてはまる状況にあったとはいえないことを客観的証拠に基づいて暗に批判している点は高く評価できる。

著者のフェルナンド・モライス (Fernando Morais) はジャーナリストで、ノン・フィクション・ライター。ジャーナリズム関係の数々の賞を受賞。サンパウロ州議会議員、同州文化長官、教育長官を務めた経験がある。